

特別支援教育の充実	年間計画に基づき、共同学習や交流を学期に1回以上(年3回以上)実践する。		<p>日常の生活や、学校行事等でこく自然に交流し合っている実態があり、児童の満足度も高い。小規模校の特性を生かして教職員や児童同士でも通常学級、特別支援学級共に知り合い声を掛け合う姿が見られる。今後も同じ時間を過ごすだけでなく、一緒に取り組み、共に活動する機会を増やして互いに助け合い認め合える豊かな人間性を養っている。</p>	<p>七小の子どもたちは、日常の中で自然体で過ごし、大人になってもフラットな関係性を築ける土壌が育まれているとの声がある。他地域出身の保護者が身構えてしまうほど、子ども同士が構えずに語り合っていることは大きな強みであり、今後も継続が望まれている。一方で、その背景には先生方の多大な努力とエネルギーがあり、感謝の思いも寄せられている。共同学習や交流は量を増やすことが目的ではなく、きめ細かな個別配慮のもとで適切に行われている点が評価されている。職員室での協力的な姿勢は子どもにも良い影響を与え、交流はキャリア形成の面でも重要だと捉えられている。特別支援教育については、子どもたちは自然に受け入れている一方、保護者の理解は十分とはいえない面もある。今後は、一人ひとりの過ごし方や支援の在り方について、クールダウン対応にとどまらず、教職員と共に考える機会を設けることが充実につながるかと期待されている。</p>	<p>今後も年間計画に基づき、児童の実態を考慮しながら共同学習や交流を年3回以上実践していく。年間計画立案の際には、一緒に取り組み、ともに活動する機会を増やすことで、互いに助け合い認め合える工夫を行っていく。児童の負担になっている様子が見られた時には、その都度、見直しをしていく。特別支援教育の必要性や在り方について、保護者や地域の理解を深めるために、学校だよりや保護者会などで発信していく。</p>
	特別支援研修会で学んだことを生かし、これまでの指導支援について検証し、それぞれのケースにあった支援を行う。		<p>ASSESS活用研修や巡回相談心理士からの実践的なアドバイスにより、特別支援について理解を深め、支援に生かすと評価する教職員が多かった。特別支援学級・特別支援教室の教員との連携も円滑に行われており、校内委員会だけでなく、職員室の一角で特別な支援を要する児童対応について教職員が話しあう様子が多く見られた。保護者向けにも講演会を実施しているが、参加者は少なく特別支援教育に関するアンケートの結果では、「答えられない わからない」と答えた保護者が12.8%だった。特別支援は個別ケースで対応することが多く、他の保護者が知る機会が少ない。また、特別支援に対して関心・理解が低い保護者も一定数いるので、保護者向けの講演会の充実や、保護者会等で話題にするなど保護者への啓発を強化していきたい。</p>	<p>特別な支援を要する児童への対応について、教職員がチームで連携しながら取り組み姿が見られ、子どもだけでなく先生方にとっても安全・安心が保たれているとの評価がある。一方で、保護者の側には十分な理解が行き届いていない現状もあり、「知らないこと」が不安や誤解につながっているとの指摘があった。子ども同士が自然に交流しているのであれば、大人同士も交流を深める機会が必要であり、保護者会を交流学級と合同で行うなどの工夫も提案されている。学校の自己評価や取組指標が高い水準にあることは素晴らしいが、特別支援教育に関するアンケートで「わからない」とする声が多くなるには、なお努力が必要と感じられている。研修会や講演会には有意義である一方、関心のある人に参加が偏りかちという課題もある。関心の低い保護者にも自分ごととして受け止めてもらえるよう、学連協などでアイデアを出し合い、学校と家庭がWIN-WINの関係を築いていくことが求められている。</p>	<p>教職員の研修については、ASSESS活用研修や巡回相談心理士からの実践的なアドバイスを受ける時間を今年度と同じように計画する。校内委員会については、定期的開催のほか、検討する必要に応じて、随時臨時校内委員会を行う。内容については特別支援教室に関わる児童についての検討は充実してきているが、昨年度途中から人数が増えた日本語指導を必要とする児童のための検討も充実させていく。保護者の理解を深めるため、特別支援教育に関する講演会を行う。関心の低い保護者に対しては、学校運営協議会などで検討しながら、七小の会の協力も求めたい。</p>
本校の特色	学校支援本部との連携を図り、地域や保護者の人材活用を積極的に行う。		<p>今年度は保護者や地域の方々に向けてもらう場面が飛躍的に伸びたと感じる1年だった。教職員側も、どのように活用すればよいかノウハウを身に付け、上手に活用できるようになった。清瀬市には教育的財産となる人物が多く存在しており、まだまだ新たな人材発掘の余地があると感じる。今後も活用する機会が増えてくると思われるので、地域コーディネーターを活用し、計画的に地域人材を活用しながら教育効果を高めたい。</p>	<p>学校支援本部「ななサボ」の働きにより保護者や地域との連携が円滑に進み、卒業生がサポートに関わる機会も増えていることは大きな教育的財産として評価されている。学校内にあった「先生とそれ以外」という垣根も薄れ、校長・副校長の姿勢のもと参加しやすい温かな雰囲気広がっているとの声もある。多くの大人が子どもに関わることは、子どもたちの安心感や「優しい大人になりたい」という思いの育ちにもつながると感じられている。一方で、連携には時間や労力が伴うため、教職員の負担軽減への配慮も必要である。今後は、年度末の学連協などで授業計画と地域の関わりについて情報交換を行うことや、特技をもつ保護者が気軽に参加できる仕組みづくりが期待される。アンケートでも地域連携への肯定的意見が多く、竹丘・松山地域の学校同士の連携も含めさらなる充実が望まれている。</p>	<p>学校支援本部「ななサボ」と教員間の距離が縮まり、連携が進んでいる。今後も互いにとって有益なものになるように改善を図りながら継続していく。地域コーディネーターを中心に学校運営協議会とも連携し、保護者・卒業生にとどまらず地域を広げて人材発掘・人材活用を進めていく。また、子供と地域の大人が関わっている様子も、「ななサボ」のグループラインや学校のホームページなどで広く発信していく。</p>
	HPやH&Sで保護者に必要な情報や学校での学習や活動の様子を掲載し、休業日以外にできるだけ毎日情報発信を行う。		<p>学校での様子や、行事での児童の姿など担当の教職員を中心に学校HPになるべく掲載しようとした。手軽に掲載できる方法の模索が今後の課題。H&Sによる連絡効果が高く、ご家庭で用意していただきたいことや家庭管理下でお願いしたいことなど、直接保護者の端末に送ることができるので確実な連絡手段としては活用できた。保護者からの要望や連絡が連絡帳からH&Sに移行したので、欠席の連絡や保護者への回答の仕方など学校の教職員、保護者共に今一度操作方法を確認したい。</p>	<p>H&Sの活用により、保護者の端末へ直接連絡が届くことで情報が確実に伝わり、直前のリマインド機能によって行事等の気配も減ったとの評価が多い。欠席連絡もしやすくなり、定着が進んでいることがうかがえる。一方で、教職員の勤務時間や確認しているのだから、夜間に送信してしまった経験もあることから、確認時間や運用ルールを明確に周知してほしいとの要望がある。HPやH&Sの連携は進んでいるものの、情報の流れをさらに分かりやすく整理できればという意見や、ななサボだよりの配信可否についての相談もあった。指題など連絡帳内容もクラス連絡で共有してほしいという声もある。高い肯定率の一方で、時間と手間の軽減は今後の課題であり、より効率的で負担の少ない情報共有の仕組みづくりが期待されている。</p>	<p>学校ホームページの更新頻度を上げるための手順がわかりやすくなり、担当教職員も作業しやすくなった。H&Sの活用については、保護者の期待が大きいことが伝わってきている。運用ルールなども確認しながら、どこまで活用するかを年度初めには教職員や七小の会・ななサボとの関係者で共通理解を図り、保護者にも周知する。健康・安全に関することなどは、リマインド発信をすることで効果が認められたので、必要に応じて行う。</p>